

## スズロとソゾロ（その三）

弁執妻 多智賀子

これまで一回にわたり、形容動詞スズロナリについて、その意味・用法を見て来た。そもそもは、スズロが音韻交替した語にソゾロも存在するので、このスズロとソゾロの相違がどこにあるかを探ろうと筆を起したものである。

ところが、スズロの意味がきわめて多岐にわたり、思いもかけず紙数を費やして、まだなかなかソゾロについて述べらるまでには至っていない。すなわち、「スズロとソゾロ」の（その一）では、平安時代の代表的な『伊勢物語』『枕草子』『源氏物語』の三作品について調べたが、すでにここで、スズロは八つの意味に分かれた。続いて、（その二）で右の三作以外の中古の作品に当たってみたところ、その内容によってかなり使用量に差が見られたが、八つの意味はどこかしらの作品で必ず使用されていた。それはばかりか、調査の結果、新たにこれまでとは違う意味も出て来た。

つまり、これまでのところでは、スズロは合計九つの意味・用法を有している語ということになる。この九つという数については、もう少し互いに関連性を見つけてまとめることが出来るかもしれないが、とりあえず今号では、これら九つの意味・用法が中世や近世の作品中にも出て来るかどうかについて見て行くことにしたい。以下、前号を引き継い

だ形で述べることにする。

☆ 中世

まず初めに、前号までと重複してしまうが、考察の結果、分類した九つの意味をすべて記載しておくことにしよう。

- A . . . . . (目的や理由がなく、心の赴くままに行動する様子を言い)      あてもなくふらふらと、漫然と
- B . . . . . (予期に反していやな事態が生じたときの不満な様子を言い)      本意である、とんでもなくひどい
- C . . . . . (しつくりしないで、面白味に欠ける様子について言い)      風情がない、つまらない
- D . . . . . (理由なく、自然に進んで行く状態、気持ちを言い)      何となく、わけもなく
- E . . . . . (出任せで、筋が通らない様子を言い)      いい加減な、でたらめな、他愛もない
- F . . . . . (あるべき程度を越えているさまを言い)      むやみに、やたらに
- G . . . . . (心を引かれることもなく、かかわりのないさまを言い)      無關心な、無関係な
- H . . . . . (予期しなかったことが出現して驚いたさまを言い)      思いがけず、意外に

I.....(思慮のない様子、考えの浅いさまを言い) 軽率である、軽々しい、はしたない、恥ずかしい

ススロの九つの意味は右の通りである。次に、参考にした中世の作品でススロが使われていたものをジャンル別に左に掲げることにする。なお、作品はジャンル毎に成立年代順に並べた。また、作品の下の( ) 内には、以後、用例を挙げる折などの略号を記した。

説話.....『宝物集』(宝物)

『発心集』(発心)

『宇治拾遺物語』(宇治)

『閑居友』(閑居)

『撰集抄』(撰集)

『十訓抄』(十訓)

『古今著聞集』(著聞)

『沙石集』(沙石)

軍記物語.....『保元物語』(保元)

『太平記』(太平)

『曾我物語』(曾我)

日記.....『建礼門院右京大夫集』(建礼門院) ^注1^

『とはすがたり』(とはず)

紀行.....『東関紀行』(東関)

隨筆.....『徒然草』(徒然)

歌集.....『秋篠月清集』(秋篠)

『新古今和歌集』(新古今)

『続古今和歌集』(続古今)

『夫木和歌抄』(夫木)

『続後拾遺和歌集』(続後拾遺) ^注2^

右の作占群を見ると、圧倒的に説話文学が多い。これは、中世が説話文学の黄金時代と言われるだけあって、元々作品数が多いので、当然のことかもしれないが、それにしても代表的な説話には、多かれ少なかれスズロが必ず用いられていることは注目に値する。というのは、説話と同じく中世に入って盛んに書かれ始めた軍記物語の場合は、代表的な『平家物語』や『平治物語』『義経記』などにスズロが全く使われていないのである。その他、歴史物語の『水鏡』および『増鏡』、隨筆の『方丈記』、物語評論の『無名草子』、紀行文の『海道記』、日記文学の『十六夜日記』『中務内侍日記』、そして室町期につくられた御伽草子にもスズロは見当たらなかった。さらにこの期に入って新しく生まれた文学ジャンルである能・狂言、抄物などの諸作品、そして中世末に成った天草版の『平家物語』や『伊曾保物語』『どちりなきりしたん』『こんてんむつすむん地』などについても、出来る限り公刊の索引類をひもといてみたが、スズロの例は出て来なかった。したがって、ジャンルによって偏りはあるが、とりあえず右に掲げた作品の中で、スズロがどのように用いられていたのかをAから順に意味グループ別に見て行くことにする。△注4▽

初めにAは、「行く」「歩く」「旅」など明らかな動きを伴った語と共に用いられ、「あてもなくふらふらと」「漫然と」の意を示すスズロである。これは、中古でも使用率が全体の約六・五パーセントで、あまり多くなかったが、中世以降もわずかに例しか出て来ない

。十日余が程、すずろに険しき谷・峯を迷ひありきけり。

△発心・三▽

。すべき方なくて、心のあられぬままにすずろに馬にうちのりて打ち出でにけり。

△発心・四▽

右のように、Aのスズロはどれも『発心集』に集中的に使われている。これらのスズロは「迷ひありく」「打ち出づ」と、はっきりした動きのある動詞にかかっているので、いずれもAの意味にとれる。ただし、右のようにかなり使用範

囲が限定されているので、Aのスズロは時代と共に徐々に衰えて行ったものであろう。

次にBとCは、いずれも中世作品における用例が見当たらなかった。Bは、予期に反していやな事象が生じたときに不満足な気持ちを表して「不本意である」「とんでもない」の意を表し、Cはしっくりしないで面白味に欠ける様子と言い、「風情がない」「つまらない」の意を表すものである。この二つは、共に中古でもその使用率が四パーセント前後とかなり低く、また用法上の特徴として両方とも連体形で使われていた。スズロがスズロナルという連体形で、下に来る体言を修飾する用法は、中古でもそれ程多くは出て来なかったが、中世に入るとより一層用例数が減少する。そこで、B・Cは元々余り使われていたわけではないこと、連体形用法であることなどから、中世の用例が皆無であるのも当然の結果と言えるかもしれない。

続くDは、中古でもその使用率が三十二・五パーセントで、スズロの九つの意味の中では最も多く用いられていた。この傾向は中世でも変わらず、さまざまなジャンルの作品で平均してよく使用されている。なお、このDは、BやCと違って、主として連用形で使われ、心情表現の語にかかつて行くものである。意味的には「何となく」「わけもなく」となるが、かかる語はおおむね動詞、形容詞、形容動詞の三つに分かれる。以下、品詞別に用例を挙げながら見て行くことにしたい。

最初に、動詞にかかつて行くスズロ二には、表現は必ずしも同じではないが、「涙が落ちる」時に、形容語として用いた例がある。

。かりの一つらこのあたる上をすぐる音のするもまづあはれとのみききて、すすろにしほしほどそながるる。

△建礼門院△

。友なし千鳥おとづれわたれる、旅の空のうれへすすろに催して、哀かたがたふかし。

△東関△

。往生の素懷を遂ぬと侍るをみるに、すすろに泪落て侍りき。哀悲き我等かな。

△撰集・一ノ三△

ながむればすすろにおつるなみだかななる時ぞ秋のゆふぐれ

△繞古今・四・三六七▽

。やまかけは こがらしふきて ものがなし すすろになみだ おちぬ日ぞなき

△連・那智籠▽

右はいずれもこれというはつきりした理由もないのに、涙が落ちる時に使っているので、スズロニはDの「何となく」の意が当てはまる。続いて、右の「涙が落ちる」とも関係しているが、「袖が濡れる」時に用いたスズロニがある。

。わがこひやこのせをせきとすずかがはすすろにそでのかくはしをれし

△秋篠・一四四五▽

。難波人あし火炊く屋に宿かりてすすろに袖のしほたる哉

△新古今・一〇・九七三▽

。つらさをあしの ほにやいでなむ しのぶれど すすろにあきは そでぬれて

△連・明心五・八・一五▽

。ひとこふる むねにあしびを たきわびて すすろにそでの ぬれそふもうし

△連・文明一五・三・二▽

。すみこそなるれ あしのやのうち たびはただ すすろにぬれし ころもへぬ

△連・那智籠▽

用例は連歌に多いが、これもただわけもなく袖が濡れる「泣クノ意」時に使っているので、スズロニはDの意味になる。ところでこのDは、理由もなく何が起る時に用いるので、動詞の中でも右に述べた「落つ」「濡る」のように、自動詞にかかる場合が多い。

。明石がた色なき人の袖をみよすすろに月もやどるものかは

△新古今・一六・一五五八▽

。この蔵すずろにゆさゆさとゆるぐ。

△宇治・八ノ三▽

。玄覺官主のすずろになき給ふ也。

△撰集・二ノ四▽

。かのみ国に生れて深く縁を結て侍りけるやらん。すずろにたのもしくおぼえて・・・

△撰集・七ノ八▽

。年来したがへる奴婢すらはなれ行に、つづきもなき人の、すずろに歎て・・・

△撰集・七ノ一四▽

。さても又いかにみし夜の夢なればすずろに覚めぬ音はなかるらん

△続後拾・一三・八七〇▽

。あききぬと おもへばゆふへ みにしみて すずろにころろ なにうかるらむ

△連・延徳四・六・一▽

。あしのしのやの かねはさびしも しぐれさへ すずろにあきの ゆめさめて・・・ △連・永正七・一〇・二〇▽

。われならぬ なみだやあきの さそふらむ すずろにすぐる をぎのうはかせ △連・永正一六・二・一九▽

右の例は「月が宿る」「蔵がゆさゆさと揺れ動く」「夢が覚める」「頼もしく思われる」「風が過ぎる」など、いずれもこちらが力を加えないのに、自然にそうなうて行く状態を言う、いわゆる自動詞にかかるスズロニの例であり、意味は「何となく」となる。なお、これと関連して、動詞の下に受身や自発の意を表す助動詞の「る」「らる」が付いても、スズロニはやはりDの意になる。

。春のあけぼの山のはかすみわたりてみゆるには、すずろにおもひいでられて・・・

△閑居・下・一▽

。生老病死、残害等の苦に責られ、すすろに浮世にほだされぬる、悲しとも申すもおろか也。

△撰集・一ノ六▽

。み侍しに、すすろに昔ゆかしく思やられて・・・

△撰集・三ノ三▽

。しぐれこし あらしもつきに ふけはてて すすろにひとぞ なほもまたるる

△連・池田▽

右に挙げた例でわかるように、「る」「らる」が付くと、「思い出される」「ほだされて」「束縛サレテ」しまう」など、こちらの意志に関係なく自然推移的にそうなってしまうことを表すので、スズロニはこれ又Dの意味となる。その他、スズロニが他動詞にかかった例もある。

。すすろに小さやかなる厨子仏をおこなひ出したり。

△宇治・八ノ三▽

。秋といへばすそのにならすはしたかのすすろに人をこひわたるかな

△秋篠・六四三▽

。春日大明神ノ示現ニヨリテスズロニ御経蔵ト云額ヲ一枚書テオキ給タリケレドモ・・・△十訓・下・一〇ノ七〇▽

。けにすすろに月にむかふながめさへつらくおぼえしこそ・・・ △とはす・五▽

。かりふきの あしびのかげに しばしねて すすろにこふる さともわすれき △連・永正二・一一・一〇▽

。あしびにや たななしをぶね しらるらむ すすろにもの あはれをぞみる △連・伊勢▽

右のうち、『宇治』と『十訓』の例はそれぞれ「何ということもなく小さな厨子に安置した仏像を修行しながらおの



ずと手に入れた」「春日大明神のお告げによって、あてもなく『御経蔵』という額を一枚書きお置きになったが・・・と解釈出来、ススロニは「おこなひ出す」「書き置く」という他動詞にかかっている。そしてその行為は、特にこれと言った目的もなく行われたことをいうので、ススロニは「何となく」のDの意味が当てはまる。その他の例も「恋ふ」「向かう」「見る」などススロニのかかる語は他動詞とはいえ、あまり動きを伴わない心情表現の言葉である。また、その行為は無意識のうちに行われ、ごく自然に行われたと判断出来るので、ススロニはDの「何となく」の意にとつていいように思う。

以上、動詞にかかるDのススロニは例が多いので、いくつかに分けて見て来た。次に形容詞にかかる例は、数も少なく、その形容詞も左のように限定されている。

。おぼつかな秋はいかなる故のあればすすろに物のかなしかるらむ

△新古今・四・三六七▽

。壁のものとぎりぎりすの声のみすすろにすさまじく・・・

△保元・上▽

。我をすてはいづくへおはしますぞとすすろにかなしくて・・・

△閑居・上ノ一七▽

。松むしの 声もほのめく 月影に すすろに月の かげぞさびしき

△新撰夷歌・六八一▽

。かじらきや とほやまぶしの すりごろも たびのひぐれや すすろかなしき

△連・老耳▽

。たもとのつゆの ほしもやられず ふけゆけば すすろにかなし くもれつき

△連・吾妻切云捨▽

。このごろの あきはしとどに そでぬれて すすろにかなし のわきぶくこゑ

△連・文安雪▽

右のうち、『保元』の例はきりぎりすの声について言う「すさまじ」が「ものさびしい」の意を表す。したがって、スズロニは、いずれも形容詞「かなし」「さびし」など、心情表現の中でも、暗く寂しい感じを示す語にかかっていることになる。

続いて形容動詞にかかるスズロニの例は、形容詞よりもさらに少ない。

。秋の野のしにつけおくすずのいははすずろに月もぬるるがほなる

△秋篠・一二二一▽

。いとようおぼえたるにもすずろにあはれ也。

△建礼門院・三三四▽

。さても往生の素懷を遂給なば、最初引接の人には伊勢のみにてこそ待らめと、すずろにあはれに侍り。

△撰集・一ノ四▽

。むしのごゑ つきのひかりに あくがれて すずろにあきぞ ころろそらなる

△連・熊野千句▽

右のように形容動詞は、「あはれなり」にかかる他に、『秋篠』の例は「何となく月も『涙ニ』濡れている様子である」、連歌の『熊野千句』は「虫の声、秋の光に心がひかれて、わけもなく秋は上の空である」と訳せるので、スズロニはDの「何となく」の意を表し、どちらかというど、マイナスイメージの心情表現の語にかかっていることになる。以上、動詞・形容詞・形容動詞にかかるスズロニを見て来たが、さらにもう一つ左のような例がある。

。かたわれづきの うすきりのそら すずろなる ころほそさも あきなれや

△連・三島千句▽

Dは普通運用形で使われるのに、右の例はスズロナルという連体形で下の「ころほそさ」にかかっている。「かたわれ月」は細いものなので、「心細さ」という語を持って来たらしいが、この場合のスズロナルはこれという原因・理

由のない「心細さ」を言うので、Dの意味にとるのがふさわしい。そして、このような連体形のDもあるのは、それだけDの用法範囲が広がっていたと言えるのではないだろうか。

次のEは、中古では全体の一六・ニパーセントというまあまあの使用率を占めていたが、中世に入ると用例数は減少する。

。何の往生の事もおぼえず。すずろなる道に入りて侍る也。

△発心・三▽

。すずろなる難波わたりのけぶりかなあし火たく屋に火たつる比

△夫木・九・三三九四▽

。誠にかれら貧なる出で立ち、すずろなる事ども思ひつらねられて・・・

△曾我・七▽

。いづくをもつてか家とす、つぐべきをばつがで、すずろなる曾我のながしとよはれぬる上は、家の紋入るべから

ず。

△曾我・八▽

。あなかまかへの きりぎりすなく すずろなる ことはさだかに きかまほし

△連・大永五・正・二五▽

Eは出任せで筋の通らない様子を言い、「いい加減な」「でたらめな」の意を表すスズロである。右に挙げた五例はいずれもこの意味にとることが出来る。しかも、すべて連体形用法である。Eの特徴の一つとして、連体形で使われ、下の体言を修飾するということが言えるので、その点からもこれらをEとすることは可能である。要するに何の根拠もないでたらめな様子を意識して捉え、どちらかというところ、批判的な目で見ているのがこのEである。ただ、中古に比べると、用例数がかなり減少して来ていることは注目すべきである。

その次のFは、中古でも二〇・七パーセントの使用率でDに次いで多かったが、中世でも相変わらずよく用いられて

いる。ところで、このFは、程度が激しいさまを言い、「むやみに」「やたらに」の意で、主として連用形で使われるものだが、その意味・用法はこれまで述べて来たうちのDによく似ている。つまり、Dがこれといった理由もなく、自然に進んで行く状態や気持ちについて「何となく」の意で使われるのに対し、そこに作爲的・意志的な意味合いが含まれ、一種の強調表現となったものがFである。したがって、Dの多くが下の自動詞にかかっていたのに対し、Fはおおむね、他動詞にかかっている。

。海賊おそるへしとて、すすろにまをすつへきにあらす。

△発心・四▽

。此等に弟子と名付けたる聖、其数待れど、すすろに世を捨てたる人はなし。

△発心・七▽

。いと買けなる聖のかくすすろに折食へば、あさましと思ひて……

△宇治・二ノ一▽

。すすろにけちかくたのもしくしたるつとめはなけれども……

△閑居・下ノ一二▽

。額にはすすろに老の波を重ね、眉には霜のつもれるをも弁へずして……

△撰集・一ノ三▽

。女の色にほだされて、すすろに心を富士の高ねによそへて……

△撰集・一ノ八▽

。此御寺のほとりにてすすろに人からむる事音よりなし。

△著聞集・五七五▽

。教浅トスズロニソシル。

△沙石・五ノ一八▽

。スズロニ世ヲモ人ヲモ補ミ……

△沙石・七ノ五▽

。あきののの つゆわけごろも ほすもをし すすろにかせよ そでなたつねそ

△連・東山▽

。いろもなき こころをそれと いひかたみ すすろにしもや かへすひとふで

△連・伊庭▽

右のうち「捨つ」「食ふ」「からむ」「かす」「かへす」などの動詞は意志的な行動を表すので、Dの「何となく」では十分に意が伝わらない。また、「重ぬ」「よそふ」「そじる」「うらむ」などは、明確な行動には現れず、精神的・心理的な動きになるが、ただ「何となく」というよりも、より積極的な自分の気持ちが見れている。よってこれら一例は、Dから進んだFの「むやみに」「やたらに」の訳がぴったりするものばかりである。また、他動詞用法の一つに「心をくたく」「アレヤコレヤト思イワスラウノ意」とか「心を尽くす」「全精力ヲ傾ケルノ意」という慣用句があるが、これにかかつて行くススロニがある。

。をりふしのうつればかはるころもでに、すすろに心をくたき……

△閑居・上・一九▽

。夜ひる隙を伺て、すすろに心をつくし、神仏に詣ても……

△撰集・一ノ二▽

。宦 御目もあやにつくづくと御覽するに、この程すすろに御心を尽して夢にもせめて会ひ見はやと……

△太平記・一八▽

右の例なども、心をくだいたり、尽くしたりするのが、単に「何となく」というのではなく、もっと強い気持ちから出ていることなので、ススロニはFの「やたらに」の意ととった方がふさわしい。さらに、Dの場合、動詞の下に受身・自発の助動詞「る」「らる」が付いた形にススロニがかかつて行く例がいくつか出て来たが、Fではこの助動詞が、使役の「す」に変わる。

。逃げんとするを捕へて、ひきとどめて、すずろに飲ませつれば・・・

△徒然・一七五▽

疊的には右の一例だけで、意外に少ない。しかし、この例は「世には心えぬ事のおほきなり」と書き出した作者兼好が、「わけのわからないこと」の一つとして、「無理強いに酒を飲ませること」を挙げ、それをススロニで修飾している点、まさにFの適切な例と言える。次に、Fの意にとれるススロニで、かかつて行く動詞は自動詞という場合がある。

。五砂境界を思へば穢土の執もあらず。すずろに進んでつひに往生をとぐる也。

△発心・四▽

。大方此の身は有るにもあらず。又久しく留むべき物にもあらず。すずろに化生する物にもあらず。

△発心・七▽

。もくづたく蟹のかやり火それすらもすずろにかかる下もえやせし

△夫木・九・三三八三▽

。むしのねも つきまつにはの くらきよに すずろにそでは ぬれまさるころ

△連・文明八・三・六▽

。かりそめに よるのうまやの ひとねがり すずろにいそぐ みちやわすれむ

△連・伊庭▽

。むすぶにも やはらにならぬ ささまくら すずろにひとの すまむいほかは

△連・伊庭▽

右の六例は自動詞にかかるので、Dの「何となく」の意にとれなくもない。しかし、このうち「進む」「化生す」「まさる」「いそぐ」の四例の場合は動きが顕著で、動く前の状態に比べると、何らかの変化が認められる。そこで、ただ穏やかに「何となく」と解釈するよりも、もっと強めた言い方の「むやみに」の方が適訳である。他の二例は「海人の蚊遣り火でさえ、むやみにこんな下燃え」「人知レス思イコガレルコト」をするだろうか（イヤそんなことはない）」

「箒枕はやたらに人の住むような庵であろうか（イヤそうではない）」と訳せ、文全体が反語の意を表している。よつてこの場合も、動詞にかかるスズロニを「むやみに」と訳した方が、反語の表現がより生きて来る。  
また、同じ自動詞にかかるスズロニの例で、涙が出ることを表現した言い方に左のような例がある。

。そこばくのいつはりを構へ、人の心をたぶらかし、売買せる、見侍りしに、すすろに泪のこぼれて侍りき。

△撰集・一ノ六▽

。げに筆に書述奉るにも、すすろに泪のもれ出て・・・

△撰集・一ノ八▽

。此事を目聞にすすろに泪もれ出て袂をしほりかねき。

△撰集・七ノ八▽

涙が出ることは、すでにDでも何例か見て来たが、その場合は「涙落つ」もしくは「涙流る」という言い方で、わけもなく涙が落ちる様子を表現していた。Fでは、その涙の落ちる度合いが強くなり、右記のように動詞が「こぼる」「もれ出づ」に変わっている。この場合、スズロニを「何となく」の意にとるのはどことなく物足りない。ここでは涙が落ちるを一層強調した表現ととり、スズロニをFの「むやみに」で訳した方がよさそうである。

以上、動詞にかかるFのスズロニについて見て来たが、先に述べたDと同じように、Fが形容詞および形容動詞にかかつて行く場合もある。初めに形容詞を修飾するものは、左の二例になる。

。甘アチハヒ苦クカハリ、ヤハラカナル水コハクナリテスズロニヒトウラメシ。

△宝物・二▽

。フケユク鐘ノ音モスズロニ恨メシク・・・

△十訓・下・九ノ八▽

Dの場合には、スズロニが形容詞を修飾すると、その形容詞は「かなし」「さびし」など暗くて寂しい心情表現の語に

限られていた。それがFでは、「うらめし」という意味的・積極的な形容詞に変わる。そこで、当然スズロニの意も「何となく」よりも「やたらに」の方がわかりやすくなる。

次に、形容動詞にかかるFのスズロニは、やはり二例で、いずれも『撰集抄』に見え、用法も酷似している。

。とにかくに、涙のすすろにしどろなるに・・・

△撰集・二ノ五▽

。此歌の所に至て、すすろに涙のしどろなるに侍り。

△撰集・四ノ二▽

「しどろ」は「秩序なく乱れたさま」をいう形容動詞である。よって、それを涙について用いれば、涙の落ち具合が普通ではなく、はなはだしいことになる。すなわち、スズロニは「何となく」ポロリと落ちる涙ではなく、質的にも量的にも激しく落ちる涙を指している。したがって、この場合のスズロニも「むやみに」と訳した方が適切である。

以上見て来たように、Fのスズロは、用法的に動詞・形容詞・形容動詞の三つにかかっていたが、これはDと同じである。要するに、Dが更に進んで、程度のはなはだしいことを述べるに至ったのがFであろう。ちなみにこのFは、中世に入ると、中古よりも意味・用法がだいぶ複雑化して来ている。

続いて、Gのスズロは、中世では左の三例のみが見られた。

。オコノ事ニ成ナムスト思テ、スズロナル法師ヲトラヘテ、ヲカシキモノニ成テ、ソナタヘヤリツ。

△十訓・上・四ノ三▽

。をこの事になりなむと思ひて、すすろなる法師をどらへて、をかしの物につくりなして・・・ △著蘭・五七五▽

。ぬし有る家には、すすろなる人、心そのままに入りくることなし。

△徒然・一三五▽



これらのうち、『十訓』と『著聞』は同じ例なので、実質的にはGは二例ということになる。ところで、このGは、「人」またはそれに類する語にかかつて、必ず連体形で使われ、「無関係な」「無關心な」の意を表すものであった。右の例もそれぞれ「何の關係もない法師を捕まえて不審な者のように仕立てて」「主人のいる家には無關係な人が思いの仮に入つて来ることはない」と訳せ、しかも連体形用法なので、明らかにGと見ることが可能である。ただし、Gは中古でも使用率が四・一パーセントと非常に低かったが、中世に入っても、この用例数から推して、ほとんど使われていないと言える。

その次のHは、中世ではわずかに左の一例が見えるだけである。

。その八分はかりのさんを、置き加ふると見れば、ある人みなながらすすろに入りにけり。

△宇治・一四ノ一一▽

Hは、予期しなかつたことが出現して驚いた時に用いるスズロで、Bと似ていた。ただBが、出現した事態に不快感を覚え、「不本意である」の意を示すのに対し、Hは単に驚くだけで、「思いがけず」の意を表す。この例は「その八分ばかりの算木を置いて粗むと見るや、その場の人たちはみな思いも寄らず笑い興じてしまった」と訳せるので、スズロは特に不快感を伴っていない、思いがけなく自然にそうなつてしまったことを言うので、Hの意となる。このHは中古でも四・七パーセントの使用率で、あまり用いられていなかったが、中世でも用例数はきわめて少ない。最後のIは、思慮のない様子を言い、「軽率である」とか「恥ずかしい」の意を表すものであった。中古では主として『宇津保物語』に使われ、使用率も六・五パーセントと低かったが、中世では、左の一例がこれに該当する。

。立はたらくにしたがひて、すすろにひられ候へば、はれにてもえひかへ候はず。

△著聞・五四二▽

。大方は知りたりとも、すすろにいひちらすは、さばかりの才にはあらぬにやときこえ。．．．△徒然・一六八▽

初めの例は、屁ひりの判官代の話である。立ち働く度に屁をひる様子にスズロニがかかっているので、意味は「軽率に」が最もふさわしい。「一番目の例は」一般に、知っていても、軽々しく放言するのはそれほどの才能ではないのであろうかと思われ、自然まちがいもあるに相違ない」という解釈になるので、「いひちらす」にかかるスズロニは、思慮もない軽はずみなさまについて述べ、Iの意になる。

さて、形容動詞スズロの中世における意味・用法について、用例を挙げながらこれまでずっと述べて来た。その結果、中古で分けた九つの意味グループのうち、B・Cのように全く例が出て来なかったものや、A・E・G・H・Iのように用例が非常に少なく、一〇例にも満たないものがあった。反対に中世になって新しく生じた意味はなかった。つまり、一言で言えば、中世では、前代の中古に比べてスズロの意味・用法がかなり狭まって来ていたと言える。では、引き続きいて近世の用法について見ることにしたい。

## ☆ 近世

この時代に関しても、公刊の索引類を元になるべく多くの作品に当たってみた。その結果、主だった作品のほとんどにスズロの用例は出て来なかった。例えば、この期の三大文豪者と言われる井原西鶴、松尾芭蕉、近松門左衛門の代表作にはスズロが使われていない。中で、しっかりとスズロが用いられていたのは『雨月物語』で、左のように計七例あった。△注5▽

。大三十日の夜、不慮まさに城を乗とりしかば、掃部殿も討死ありしなり。

△菊花の約▽

。近曾すずろに物のなつかしくありしかば、せめて其隙をも見たきままに帰りぬれど……

△浅茅が宿▽

。五更の天明ゆく比、現なき心にもすずろに寒かりければ……

△〃〃▽

。今よからぬ言を聞ものならば、不慮なる事をや仕出ん。

△吉備津の釜▽

。タタごとにはつかのもとに詣て見れば、小草はやくも繁りて虫のこゑすずるに悲し。

△〃〃▽

。面さと打赤めて恥かしげなる形の貴やかなるに、不慮に心動きて・・・

△蛇性の姪▽

。道に倒るるともいかでかはと聞ゆるに、不慮ながら出たちぬ。

△〃〃▽

『雨月物語』の特徴として、右記のように半分以上のスズロに漢字の「不慮」が当てられている。「不慮」は「思いをめぐらさない」あるいは「思いがけない」の意を表す漢語である。そして、これまで見て来たスズロのA-Iの意味はどれも、多かれ少なかれ右の意を含んでいるので、この漢字を当てておくことは問題とはならない。さてここで、右の七例を一つずつ吟味してみることになろう。まず最初の「菊花の約」の例は、スズロニが攻撃的・積極的な「乗とる」という動詞にかかっているので、Fの「むやみに」の意が最も当てはまる。次の「浅茅が宿」の例も、それほど強くはないが、程度の激しさを言い、「なつかし」にかかるスズロニは「しきりに」の意を表しているので、Fとなる。三番目の「浅茅が宿」の例と「吉備津の釜」の後の方の例は、それぞれ暗くて寂しいイメージの形容詞「寒し」「悲し」にかかり、これというはっきりした理由もない様子を表しているため、Dの「何となく」の意がふさわしい。また、「吉備津の釜」の初めの方の例は、『雨月物語』中唯一の連体形用法で、「今よくない言葉を知いたらば、どんな短慮なことをしてかざないとも限りません」と訳せるので、スズロは考えの浅いさまを言うIの意にとれる。残る「蛇性の姪」の二例は、いずれも予期しなかったことが出現して驚いた様子を言うものである。ただ、驚いたと言っても、初めの方は「恥ずかしそうで上品な様子に思わず心を引かれて」の意で、ひたすら意外であったことを強調しているためHとなる。ところが、最後の例は予期に反していやな事態が生じた時の不満な様子を言い、「不本意ながら出立した」の意となるので、Bに該当する。

以上、『雨月物語』のスズロは意味グループで言うると、B一、D二、F二、H一、I一の七例になる。なお、この作品にこれだけ変化に富んだいろいろな意味グループが見られるのは、作者上田秋成がもっぱら古典を重んじ、擬古文で書き表しているためであろう。つまり、スズロが質量共に最も盛んに使われていた中古の状態がそのまま反映されているのが『雨月物語』ということになる。他に、近世の作品で目に止まったスズロは、左のようなものである。

。細腰の法師すずろに踊りけり

△蕪村発句・二二九八▽

。古曾部の入道はじめてのげさんに、引出物見すべきとて、錦の小袋をさがし求めける風流などおもひ出つつすずろ  
春色にたえず待れば・・・

△蕪村句集・一四二▽

。しかるにその身の程をも顧みず、鄙陋の挙動すまこは礼なし。こは漫也。

△椿説弓張月・前編・巻之一▽

。かかる瀬に沈み給はずは、いともかしこき中城のおん身をもて孤島にさすらひ給はんや。こはすずろ也。

△椿説弓張月・拾遺・巻之二▽

蕪村の俳句の例は、スズロ二が「踊りけり」にかかっているので、激しい動きが感じられ、Fの「やたらに」の意がふさわしい。次の説明文は「山吹や井手を流るる鈍層」という俳句に付されたもので、春の気色について述べているため、Dの「何となく」が的確な訳となる。続く『椿説弓張月』の二例は用法的によく似ているが、意味は違う。初めの方は「鄙陋(ひろう)の挙動(ふるまひ)」が「下品な動作」を意味し、それが「礼(い)や(なし)」、つまり「無礼である」となるので、これと併行した形で使われているスズロは、Iの「軽率である」の意が最も当てはまる。二番目の例は前文が「こつという時機にお会いなさらねば、とても恐れ多い東宮の御身で孤島にさすらいなさることがあろうか」

と訳せるので、スズロは日の「意外である」とれる。要するに、蕪村も馬琴も古典に造詣が深く、擬古的な文章を書いていたので、スズロを種々の意味でかなり自由に用いていたようである。

以上、近世については文献をすべて見切れなかつた嫌いはあるが、中世に比べて、ともかくスズロの用例が減少していることは確かである。ただ、近世に入るとスズロはもっぱら古典的な文章に使われるだけで、消滅してしまったとは言えない。そのわけは、近世の辞書の一つ『書言字考節用集』にはスズロがしっかりと掲載されているからである。よって、近世にもスズロは一般にまだ命脈を保っていたものと思われる。なお、中古であれ程多くの意味・用法で使われていたスズロが、中世・近世と時代が経つにつれて用例数が減少して行った理由の一つとして、類義語ソゾロの存在が大きく影響しているのではないかと推測される。さらに、スズロはまた、ソゾロという形でも用いられていた。このソゾロおよびソゾロの通時的な意味・用法、そしてスズロとの関係については、引き続き次号で考察することにした。今回はかなり紙数も尽きたので、大方のご叱正を期待してひとまずこの辺で筆をおくことにする。

## 注1

『建礼門院右京大夫集』は、歌集とも考えられる。ただ、各歌に添えられた詞書が長く、歌日記風な歌集なので、今回は日記として扱った。

## 2

歌集は『新編国歌大観』の一〜三巻（勅撰集・私撰集・私家集I）を参考とした。ただし、スズロが使われた歌で、作者から判断して、明らかに平安時代の作とわかるもの、および重複しているものは除外した。

## 3

連歌は『新撰寛政波集自立語索引』（山根清隆、昭和四十五年、広島中世文芸研究会）の他に左の三冊を参考とした。

『連歌の新研究』索引編 勢田勝郎、おうふう

七賢の部 平成五年二月二十五日

宗祇の部 平成六年二月二十五日

肖柏・宗長の部 平成七年二月二十五日

書名は多種にわたるので、連歌の場合、△連▽として、その下に△三島千句▽△伊庭▽△永正七・一〇・二〇▽など細かい方を入れた。

4

右以外で今回参考にした作品は左に記すものである。なお、ここに掲げなかったものについては、岩波書店の旧日本古典文学大系本を参考にした。

。宝物……『宮内庁書陵部蔵本 宝物集総索引』、月本直子・雅幸、汲古書院、平成五年

。発心……『発心集 本文・自立語索引』、高尾稔・長嶋正文、清文堂、昭和六十年

。閑居……『閑居友 本文及び総索引』、峰岸明、笠間書院、昭和四十九年

。建礼門院・『建礼門院右京大夫集 校本及び総索引』、井狩正司、笠間書院、昭和四十四年

。東関……『東関紀行 本文及び総索引』、江口正弘、笠間書院、昭和五十二年

。十訓……『十訓抄 本文と索引』、泉基博、笠間書院、昭和五十七年

。沙石……『慶長十年 古活字本 沙石集総索引』、深井一郎、勉誠社、昭和五十五年

。とはず……『とはすがたり繪索引』、辻村敏樹、笠間書院、一九九二年

。太平……『土井本 太平記 本文及び語彙索引』、西端幸雄・志甫田和恵、勉誠社、一九九七年

5

近世の作品については、『権説』張月』は岩波日本古典文学大系本(旧版)を、他のものは左記の本を参考にした。

。兩月……『兩月物語本文及び繪索引』、鈴木丹十郎、武蔵野書院、一九九〇年

。蕪村……『芭蕉・蕪村発句繪索引』、井本農一・浅野信・道本武彦・谷地快一、角川書店、昭和五十八年

『蕪村句集 影印翻刻 索引』、山本唯一、法蔵館、昭和四十六年